

南方（ニューギニア）

あゝニューギニア

危機一髪

高知県 岡田 浩 揮

太平洋戦争中、最大の過酷な戦いと言われた「パプア、ニューギニアの戦いの末路」と思われる写真集を贈られた。戦争という、この世の最悪な最後をまざまざと見た。また、戦争は人を変えるものでもあるとも思った。

私は、二十一〜二十二歳の青年時代に、戦場にあつて、ラエと言う東部ニューギニアで、木の

根、草の根を食いながら、五十五〜五十六キロあつた体重が三七キロになるほどの苦勞を重ねながら、大ジャングルの中や、四〇〇〇メートルのサラワケットの頂上などを三十九日間かけて漸く通り抜けて、キヤリという所に到達しました。

熱帯のニューギニアでも、これだけ高い山になれば、夜間ともなると氷点下一八〜二〇度位の寒さになるので、それに耐えなければなりません。実は、その当時、このことが分かれば確実に死刑にされる菊の御紋章のある銃の木質部を焚いて暖をとり、それで私共は生き延びましたが、それができない多くの戦友達は、この四一〇〇メートルの山頂で凍死してしまいました。

私の当時の所属部隊の海軍佐世保鎮守府第五特

別陸戦隊の約三千五百人のうち、目的地の西部ニューギニアのキヤリに到達できた者は僅か二百九十三人になっておりました。

この山では、陸海軍の兵隊が何万人も死亡しており、そのご遺骨が故国日本に一日も早く帰らしてもらうことを六十年近く待ち続けておるところです。

戦争というのは、いつの時代でも、国の上層部の思惑次第で、我々が体験したような悲惨な姿になつてしまうのであります。

現在も世界の各地で毎日のように、人間が人間を殺すという、この世の最悪の事態が行われ、日本の若者もいつ戦争に引き込まれるか分かりませんが、諸君はそんな悪事に絶対反対しなければなりません。

私これから申し上げるような、太平洋戦争のニューギニアの実戦に参加した一員としての私の言う言葉は、身を以つてからの体験であるので、戦争未体験の方はよくよく考えて、今後の世界の

あり方、日本の立場、日本人は、何故戦争が起き、その結果はどのように悲惨であるかを知ってもらいたいと思う。

昭和十八（一九四三）年七月三十日夕方、東部ニューギニア、サラモアにおいて、米豪軍の大型長距離砲の第一弾が、我が佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の基地の中の四抱え以上もある熱帯樹とその周りに休息していた十五、六人の隊員を木端微塵にしてしまった。その場にいた私は、幸い一、二秒の違いで書類を持って同年兵と二人で防空壕へ入った瞬間だったので、辛うじて一命を落とすところを免れることができた。

翌日からは、毎日毎日この長距離砲が攻撃して来るけれども、何分にも日本軍の大砲が届かない遠距離から撃って来られるので、我が陸戦隊は如何ともすることはできなかった。日中次々と襲つて来るアメリカ軍の航空機ノースアメリカンB25やロッキードP38の銃撃に追いまくられて、砲撃

と銃撃によって我々は、だんだんとサラモア半島の先端近いジャングルに追い詰められて行つた。

ところで昭和十八年八月に入つて、突然当時ラバウルにあつた第八海軍航空艦隊司令部からの転進命令が出たので、佐世保鎮守府第五特別陸戦隊は、後方基地へ移動することになって、我々は命を永らえることができた訳である。

既に長野県出身の部隊長・月岡寅重海軍中佐（没後大佐）や、高知県南国市上末松出身の副官・岡林一夫海軍大尉（没後少佐）は、昭和十八年六月三十日に壮烈な戦死を遂げ、後任の部隊長・竹内中佐もラエで戦死したため、その後任は残存部隊の最上級士官S少佐が指揮官となり、大ジャングルの中のサラワケット高峰を越して、遙か後方のキャリへ向かう以外の方法は無かつた。

そのジャングルとは、昔も今も同じであつて、平成十三（二〇〇一）年八月の産経新聞でも発表された通り、まさに天にも届く大木の海また海の

ようなところであり、その鬱蒼たる中の道なき道を木の根、草の根を飯盒で炊き食料としながら、ラエを出発してから三十九日目に第一の目的地サラワケット頂上（標高約四一〇〇メートル以上）に、夕暮れに到着することができた。

勿論、温度計等は持つていなかったが、恐らく氷点下二〇度位ではなかつたかと私共は話し合つた。熱帯地域の海軍の軍装である半袖シャツと半ズボンで登つて来たので、身体は切られるように寒い。頂上に到達すると同時に日が暮れた。すると誰が火をつけたか知らないが、それまで肌身離さず持つていた鉄砲を焼き始めた。すると次々と各隊員は、それぞれ自分の鉄砲を火中へ投げ入れ、その火は天にも届く程の大火になつた。私共は寛いで火の周りを囲み、雑談を始めた。

しかし、この兵器を消滅するという行為は、當時としては絶対してはならないことだったので、沢山の隊員の中には、火から離れた場所で野営した人も多かつた。その夜は、私共は一睡もせず

火の周りで軍歌を歌いながら夜を明かしたため、生き残ることができたのだった。しかし驚いたことは、翌朝野営組は一人残らず全員凍死してしまっていた。誠に残念至極であったが、彼らは彼らなりに正統な道を歩んだことで仕方の無いことであった。

さあこれからいよいよ急峻絶壁のサワラケット北壁を降りなければならぬ。残存部隊を集合させた指揮官S少佐は、自分も焚火で生き残った癖に

「貴様達は、昨夜天皇陛下の菊の御紋章の入った小銃を火中に投げ入れて灰燼に帰するという重大な不敬を犯したので、将来このことを他の者に知られたら、必ず全員が死刑にされることは間違いないが無い。貴様達が生きている間、絶対この事について口外することを禁ずる」

と言ひ渡した。当時としては至極当然のことながら、人間という者は、いざ自分の生命に関するこ

となれば、後の事等は全然考えることなく、どんなことでも平気であるのだと思われる。

それからサワラケットの北壁をゆつくりと足元を踏み締めながら、正午過ぎ、漸く下の谷川まで降りることができた。それから毎日ジャングルを潜りながら五日位経って目的地キャリへ到着することができた。

今日考えても私の一生でこの時の逃避行が、空前絶後の一大難苦行であったことは間違い無い。

キャリでは一週間位静養することができたが、最終目的地である中部ニューギニアのウエワークまで行くのには、今度は船舶を利用することになり、三百〜四百人位乗れる船を探していた所、幸いなことに陸軍の徴用船で二百〜三百人乗れる船が入港して来たので、交渉の結果、了解を取り付けることができたので、佐世保鎮守府第五特別陸戦隊の生き残り全員が、夕方乗船することができた。

当時東部ニューギニアの制空権は、全部アメリカが掌握していたので、沿岸近くの海上でも夜間でなければ一切行動はできなかった。私が見てみると、その船の船長は、五十歳位で、私の父が生存していたならば、ほとんど同年代位の老人（その頃は、五十歳位で既に老人となっていた）だったが、ウエワークに向かつて航行中のある日の午後二時頃、途中で寄港していた港を出航した。

私達は、今日はちょっと早い出発だと話していたが、ウエワークも大分近づいていたので、早く出発したものだと思っていたところ、突然遠く西北西の上空に機影が、入道雲の合間に見え隠れした。我々は、久方ぶりの友軍機を見つけたものと思ひ、全員大喜びで入道雲から現われる飛行機を今か今かと待っていた。ところがそれは大間違い。今度後方に大きく写し出された機影とは、当時アメリカ空軍切つての大型爆撃機コンソリーデットであった。

一同肝を潰したが遅かった。我々の船は微用船だから、対空用の機銃も一丁もない丸腰だ。敵は攻撃して来ないことを確かめた上で直ぐ攻撃態勢に入り、船の後方四五度の角度へ低空でピタリにつけた。この船は民間の船であるから、全速力を出しても六ノットだ。私はこの時肝を据えた。元より私のこの身は、とうの昔に捨ててしまっているけれども、これが弾丸の撃ち合いで斃ころされるなら仕方がないが、今ここでこんな格好で遣られることはたまらない。私は静かに目を閉じた。

ホントに僅かの時間であったが、瞬間的にサーと風を切るような音と同時に船は大音響と共に激動した。幸い飛行機の直撃からは免れたが、前方へ舞い上がった米機は、グルリと回転しながら再び攻撃態勢に入った。今度はいよいよ私の最後だと瞬間的な考えが頭の中を走ると同時に、再び大音響がして船は引つ繰り返ると思われるような左右動がした。

続いて米機の二五ミリの機関砲の砲撃である。

ドドドドと船の甲板に伏していた兵隊達を薙ぎ倒した。甲板は、多くの撃たれた兵隊達の血の海となったが、不思議なことに私には命中しなかった。ところが、次は第三回目の攻撃だと思っ間もなく米機は、爆弾がなかったものと見えて、上昇すると同時に遙か彼方へ飛び去って機影は見えなくなった。

「助かった」船の上では一同立ち上がる事もできなかった。極めて短時間ではあったが、この時の私は、一生絶対に忘れることができない程の緊張が続いた。

私は敢えて言う。

戦争ということ知らない人々よ……！

君達は、戦争、戦争と簡単な考えで戦争のことを言われることは、それは大間違いである。戦後半世紀以上平穩無事な日時が続いた今日、太平洋戦争中直接戦闘に関係なき一般の何十万人という多くの無事の日本人が、米の飛行機の餌食となっ

たことを君達は知らないだろうが、広島・長崎の結末を見ても、また古今東西戦争位悲惨な結末を招くことは、歴史にその現実がはっきり証明している所である。

今日世界中を見渡しても、毎日毎日平気で人間が人間を殺戮する悪行が続いている国々を見た時、我々はその国の為政者達も、悪国と足並みを揃えるような事を続けていけば、今後の戦いは太平洋戦争後位の被害では絶対済まされないだろう。

いずれにしろ戦争とは、この世の中の最悪であることは絶対間違いない事実である。